
日帰りテクテク貴族

kuroyumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日帰りテクテク貴族

【Nコード】

N7951U

【作者名】

k u r o y u m i

【あらすじ】

来栖天羅きすみてんらは頭を抱えていた。約二年前に周囲にも明かさず、突然日本を飛び出し、英国は倫敦ロンドン、亡き父の旧友であり、マエストロとあだ名される師の元で修業に明け暮れた。月日は流れ、日本への帰国が決まった直後、修行から解放され、やっとあの頃の愚かさが呼び起こされる。

「あんたなんか……」

まだまだ青春の暇つぶしとはいえ、真剣に想っていた人に振られるところから、絶交状態で泣く泣く日本を飛び出したことを。仲直り

の仕方は師の妻から教えられた現物主義^{プレゼント}。しかし、目的のものは高価で限定品で見つかるはずもない。ついでに帰国直前だというのに、何やら急を要する依頼が舞いこむ。『夜会』という大きなくりの中に属するがゆえに、日本への帰国は遅れに遅れそうな様子である。一方、馴染みの『貴族』の相方と、手伝いをしてくれる樞師^{くるる}一家の友人（一応元想い人）が帰りを待つ故郷の街でも夜会に属する人々が何やら催そうと画策し始めた。季節は桃の節句。夜の雛祭りは今年も行われようとしているのだが……。

怪盗とは盗みをおかす者とあるが、そうとは限らない。怪人という言葉もある。おかしなことをする連中であるが、言葉のくくりは同じようなものだ。事をより騒がしくするための役割をいつしか貴族が演じだし、それが怪盗怪人となった事象の流れもあるだろう。ようは暇潰しだが、今ではそれを生業とする『貴族』や『怪盗・怪人』などなどが『夜会』という世界で、楽しみあい、泣き笑いあい、そして、時に争いあう。主に生死をかけるのは『怪人・怪盗』だが。しかし、今回は前哨戦。それ以前に来栖天羅は自分の正体をはっきりさせる必要に迫られることになる。

なぜなら来栖天羅は首狩り尋鬼^{くびかりじんぎ}——名のある怪盗なのだから、正体不明であるがゆえに、自分の正体を確かなものにするには、ただ帰国して故郷に足を踏み入れるだけではいかなくなる。

P r o l o g u e (前書き)

テストがてらに初投稿します。よろしくお願いします

Prologue

Prologue 1

その人物は旧市街の屋上伝いを飛びながら、一時的に警察の追跡をまいた。

以前は緩かった警察の追跡は、ここ最近になって一人の警部が加わってからしつこさをひと際増した。人間離れした跳躍力で逃げようとしても、近頃では着地地点に待ち伏せされることも多く、予断を許さない。

夜会の誰かが公安に知恵を与えたか、夜会の貴族が好き好んで直接指揮を執っている可能性が高い。うまく逃げ切っても、隠れ家で数日は潜伏しなければならぬ事も少なくない。

(?)

ふと、外の空気が変化しているようだった。追っていた群れの息遣いが変わったような静けさである。次の瞬間、外から警察の犬どもが「俺の頭がー」「どこだー」という叫びが上がる。

群れの阿鼻叫喚があたりに響いた直後、そばに現れた他者の気配に怪盗は構えた。

「隠れ家を転々とし、別人に変装するのを何度か繰り返して逃げる常套手段か」

部屋の暗がりの中から声だけが伝わってくる。

「追手には少し黙ってもらっている。適当に選んだ一人には悪いが、少しばかり首を涼しくしてもらった」

自分と似た同業者だとすでに判断される。今夜の収穫物を懷に収め、そのまま得物に手を伸ばす。

外からは場を律する絶対的な声で「リヴィングだ。奴を探せ」という命令が叫ばれる。

「今日はうるさい警部も一緒だ。まあ、ああいう風に勘違いなさる

が」

「何者だ？」

「賞金首制度の上で、貴君を討伐しに参上した」

「噂に聞く賞金首で荒稼ぎしている同業者か。ならば、ここで俺がお前に代わって倫敦の夜会を牛耳ってやる」

「やる気なのはいいが、一人の怪盗がそんな役割を果たせると本気で思っているのか？」

「ああ。第一に、多くの同業者がお前という新参者のせいで商売あがったりだ」

「だから下請で盗みを代行するか。古き良き時代のスタイルは廃れ行くのみとは古参方も嘆かれているものを。うむ、どうやら今意向は向き合ってるようだが、その大義でもない意見は責任逃れとは言えないか？」

薄明かりの中、無造作に放られた一撃が閃く。語るに落ちた人影を怪盗はナイフの投擲で黙らせた。人影は難なくそれを横へと避ける。しかし、ナイフが急に軌道を変えて襲いかかる。予測していなかった軌道の変化に人影もすかさず手にした得物で対応する。

軽快な金属音とともに弾かれたナイフが持ち主の手元に戻る。

「交わす言葉も確かにない」

肩を落としたような物言いで、人影は淡い明かりの一步手前まで来て立ち止まる。

「こちらもそれなりの資金がいるんでね」

その首から上は、ぼんやりとしたシルエットから目深にかぶったシルクハットであるとわかる。まあいいとつぶやきながら、人の形をした影は帽子のつばに指をかけたようだった。

「さて、あんたの首はどれだったけかな？」

人影はその場で初動を見せた。それはシルクハットを盛大に脱ぐような動きだった。

Prologue 2

三月初日。ロンドン・ヒースロー空港のただっ広いロビーにて。

「ああ……………はああ」

そそくさと免税店から撤退しながら、しみじみと悶絶を吐く。

こうも外国人は日本人を若く見るものなのか。そうは言っても、高校一年生一人がブランドショップでうろちよろすれば、それは冷やかしにしか見えない。態度のはっきりした店員が懐の寒そうな客を相手にしないのは当然だ。これならサンドラさんに頼むんだったと今さら後悔しても、もう遅い。

ロンドン市内のつてというつてをあたるも目的の物とはまったく巡り会わないまま。ずいぶん前から人の手を借りて探しているものであっても、ここイギリスでの約二年の生活の忙しさにかまけて帰国直前の一昨夜まで、ほったらかしにしていたのだ。

「そんなにアレって人気だったのか……」

空港の免税店だけが最後の頼みだった。だが、こんなにも手に入りにくい物とは思わなかった。いよいよ諦めるべきなのか。刻々と搭乗時刻が迫る。ふと、ロンドンのどこかにある偽物を並べた商店を思い出してみる。ならば、とは考えたくもない。偽物の購入及び所持は良くて没収、悪くて法的罰則が課される。欧州ではブランドメーカーを守るために特に厳しく、たかが、といえる代物でも用心しないといけない。

これ以上警察沙汰に巻きこまれてなるものか。

「そもそもアレは限定品なんだし」

ない物はないんだ。そう自分を諦めさせるべく独りごちっていると、目の前を一組の母娘が通り過ぎる。

一瞬で視界が鮮明になった。どんなに忠実な犬でもお預けを食らえば、「よし」の「よ」の瞬間に、がつきたくなるもの。

「ちよちよ、ちょっとごめんよ、お嬢さん」

反射的に、少女を追いかけて呼び止めた。五歳くらいだろうか、ちよ

こん、という擬音がぴったりの西洋人形のような少女が振りかえる。
「おにーちゃん、なーに？」

少女と同じ視線にしゃがみこんで、抱きかかえられた胸元のそれを指差して問う。

「その、君の持つてる、それってどこに売ってるのか教えてくれな
いかな？」

少女の胸元には目的の物が抱かれているのだ。

「何か用？」と警戒を漂わせた母親が訝しげに応じ、戸惑ってしま
うが、ここで引き下がるわけにはいかなかった。

「ああ、いやいや、そのですね。これをずっと探してるんですけど、
どこを探しても見つからなくて」

本当はここ三日ほど、保護者不在で軒並み店員に相手にされなかつ
たのだ。

「この機を逃すと、もうこっちに来れなくなるかもしれない」

切羽詰っているので自制がきかなくなっている自分がわかる。

少女に視線を合わせるために膝をつき、両手を合わせて懇願してい
る図は人目をはばからない命乞いのように見える。もしくはこっち
ではプロポーズだろうか。

「これはねこれはね、パパから貰ったの」

想像の範囲内のものだが、母親の代わりにあっさりと少女が必死に
答えてくれた。望んだものではない答えに情けない表情をしてしま
ったんだろう。警戒心を解いた母親は、すまなそうな顔をする。

「ごめんね。どこで主人が買ったのか私も知らないの」

場所さえ分かれば、電話一本でサンドラさんに頼めるのに、現実
は甘くない。

「ええっと、気にしないで下さい。しょうがないです。いいな、お
兄ちゃんも欲しいな」

「お兄ちゃんもパパから貰えばいいんだよー」

「ちよっと難しいな。僕のパパはちよっと遠くにいて、あんまり帰
ってこれないんだよ」

「ええー！ それじゃ、お誕生日もクリスマスも一緒じゃないの？ ハードルを上げてくれるか。これくらいの子ならそう返してくるのは予想できるはずだった。表情に出さず、激しく後悔する。そんな純粹さが過剰に可愛さ余って憎い。けど、やっぱり可愛いから許す。はてさて何と言えはいいのやら。」

「うんとねー、僕のパパはサンタさんの国よりも、ずーっと遠い国にいるからだよ」

「すごい！」

そうかなと答えると、さらに少女は「すごいすごい」を連発し、感激で爆発しそうに小刻みに跳ねる。そういう風に感激されても困るのだが。目をキラキラ輝かせる少女に笑顔で合わせるしなくなる。その向こうで母親の眼差しが悲しみと共に向けられる。どうやら意味を汲み取ってくれたようだ。もういないという事を何と表せばいいのか。それを自分がこの子に教えてもいいけない気がするので、話題を変える。

「これからどこ行くの？ 旅行？」

「うん。けどね、さっきまで、パパが、パパがね、いたのに、どこかいっちゃった。先に行っててって。そしたらママおこっちゃって。お兄ちゃんもパパにおいてかれたの？」

何やら墓穴を掘った質問だった。無理矢理頷く自分を哀れ三昧に自嘲していると、母親が「時間は大丈夫かしら？」という風に腕時計を指でとんとんと叩く。

「おっと、そろそろお兄ちゃんも飛行機に乗んなきゃ。それでは二人のプリティーなレディー、どうもありがとうございます。よい旅と出会いを」

「あら、どういたしまして」

お世辞は師のようにキザにはいかなかったが、少しだけ満足げに母親は娘の背中を押す。少女も「バイバーイ」と手を振りながら去った。

最後の希望も幻に終わった。しばし、その場で立ちすくむ。このまま

イギリスを去る事になろうとは、今になって現れた後悔に自噴する。
「うーん、嗚呼……どうしょ」

挙動不審に唸りながらも搭乗口に向かうしかない。

これから半日以上の長旅の間、この後悔と明日以降に味わう惨めな顛末に悩まされるのだろう。それを思うと、恐怖で日本に帰る気がなくなりそうになる。機内の映画はそういうのを忘れるものしよう。バイオレンスとかホラーとか、特に絶対に愛憎ものは見ない。カンフー映画辺りを見ないと無理だ。

と、タタタと背後から駆け足が迫り、子供の気配と匂いで背後の温度が上がる。

「おにーちゃんっ！」

振り向くと、先ほどの少女がロザリーを胸に抱きながら一枚の洋封筒を差し出した。

「これね、あのおじさんがおにーちゃんにつて……、あれ？」
後ろを指差したまま少女は首を傾ける。

封筒を受け取って、その指差した方向を見るが、搭乗時刻が近づいたロビーは珍しく閑散とし、それらしい人物はいなかった。

洋封筒を裏返す。そこには馴染み深い『the Night』の文字があった。ふと、封筒の向こう側で少女が何やら言いたそうにしている。

「どうしたの？」

「うん、私のロザリーだかせてあげるっ」

無垢な笑顔に魔がさした。ほんと純心なのは罪なので嫌がらせをしたくなってしまった。

「うわ、ありがとう。でも、おにーちゃんが持ってちゃうかもしれないよぉ？」

「ふえ」この世の終わりに絶句し、半泣きになりかけて少女は硬直する。

「だっ、だい、大丈夫、うそうそ。気持ちだけで嬉しいよ。そうだ。アメをあげるからさ」

あわてて手品師のように手の内からアメ玉一粒を少女の掌の中に忍ばせる。一転して、その頬をほころばしそうになるが、

「ママには内緒？」

少女は切々と訴える。この子くらいの年齢なら歯は清潔にとうるさく注意されているのだろう。母親には内緒にしてあげると約束した途端、少女は即座に飴玉を口の中に放り投げた。すると、あどけない満面の笑みでその両脇を抱えてロザリーを前に差し出した。

「じゃあじゃあ、ロザリーをナデナデしていいよ」

それくらいならとロザリーをなでる。実は抱くのは何か気が引けていたのだ。

しかし、つい「ほほお」と声を上げてしまう。職人の手で丁寧に作られたのだから安物とはやはり感触がまったく違う。材質は糸に至るまで一級品なのだろうか。一生ものと言っても過言ではない。普通の素材ではなく、まだざらついた新品の革の手応えがある。幼児なら邪険に扱うものだが、その都度、なめされて年季が入ってくる感触と共に愛着も増すはずだ。

「ところで、ママは？」

「お手洗いで。でもね、ぜったい、パパと電話でケンカしてるんだよー」

「あはは、そう、なんだ」

おませさんは得意げにだが、少女から成長する片鱗ともいえる呆れ顔を浮かべる。対して、その間も自分の手はずっとロザリーの頭をなで続ける。

そして、二人してロザリーのよさににやけてしまうのであった。そんな幸せな顔を見て、この約二年の英国修行が綺麗に締めくくられる気がした。

独りトランク片手に神流木の地を飛び出し、英国修行が始まった頃は長く辛かったが、手にするものは大きかったと思う。

でも、この英国修行を決断した直後、ある犠牲を払ったのだから――それがどんなに辛い思い出として苦しめられた事だろう……が、

がですよ、やはりこの品ならと姑息な考えをめぐらせてしまう。どうして汚い我が心のどす黒さだろう。日本に残った仲間とは後味悪い別れだったのだ。特に、あの人にはこれから修行に向かう人間をズタボロにする決定打を打ちこまれたのだから、物で釣って何とかなるはずがない。あの人の性格からして、どのような感情で脚色されていても自分の事を覚えているのならまだいいが、なかった事にされているとさらにつらいんだよー。

そうやって過去を振り返りながら熱心になでていると、弱きさに負けて、ぽろりと口から酷い言葉がこぼれた。

「やっぱり、お兄ちゃんにこの子ちょうだい？」

「あ、あげないよー」

少女が不安げな声をあげ、必死に胸の中にロザリーを抱き戻す。

「……ロザリーじゃないとだめなの？」

「いやいや、そうじゃなくって。うーん、実はさ、お兄ちゃん、ケンカしたままの子と仲直りしたくてさ。まあ、いいや。大丈夫だよ、ロザリーは君と一緒にの方が幸せなんだし、ね。そうだ、ママが待ってるよ」

そして、もう一つ飴玉を掌か出して、お詫びをする。元気いっぱいを取り戻し、手を振りながら走り去る少女をこちらも手を振って見送る。

相手がどう思おうと、自分は諦めきれないのだから仕方がない。多くの人がその事を未練がましいと言うものだが、独善的になれば、数ある内の一つくらいはいい話のまま続いてほしい。

暦では立春をすでに迎えた日本。三寒四温の晩寒のままか、少しは暖かい初春か。暖かい事を願おう。

さてと、と腕時計を見る。搭乗時刻だが、少女が振り向かなくなつたのを確認し回れ右。出口へと足を向けた。

P r o l o g u e (後書き)

続く

3-1、Wonder Wanderer (前書き)

日本への帰国まで残るは飛行機に乗り込むだけだったのだが、空港の出口へときびすを返した来栖天羅を待ち受けるのは倫敦夜会と、そして、『英国の番犬』だった。

<Prologue↓英国パート2>

3-1、Wonder Wanderer

Wonder Wanderer

もう少し早ければ、キャンセル料だけですんだはずだと思いながら、飛行機のチケットを一枚無駄にし、封筒の手紙に記されていたとおりに空港からヒースロー・ターミナル駅に降りると、ちょうどロンドン行きのヒースロー・エクスプレスが到着したところだった。流動的な人の波が騒々しい構内のだ真ん中で辺りを見回す。そして、気づいた時には、約束の人物は初めからそこにいたかのように天羅の十数メートル先の正面に現れた。

長年愛用したような褐色のトレンチコートに身を包んだ男は胸に手を押し当て、軽く会釈をした。その脇には見慣れた薄い冊子が抱えられている。

どうしてもため息をつきたくなるが、夜会の人間を前にして失礼なので、サンドラさんの笑顔でも想像しよう。そこで石須の笑顔ではないことに情けなくなったが。

「先日から僕は依頼を受け付けてません。マエストロからは伝わっていませんか？」

「今回は違います。特別な依頼を伝えに参りました」

歩み寄る役員は小脇にレストランにあるようなメニューを抱えている。

「ええっと、まず、すいませんが、無駄になった飛行機のチケット代を払ってもらえるといいな、なんて。弟子上がりの風当たりは厳しいですから、僕の懷事情も困ったことになっていて。それと、すぐに終る仕事ですよね？」

自分が間の抜けたタイプだと自覚している分、言葉でカバーするが、それが今利己的な言葉であったことに天羅は、目の前の人物の

固定された顔を見て、「あっ」と声を上げるように慌てさせられた。慇懃無礼な言葉にも紳士は平然と言う。

「それは貴方の腕次第です。まず報酬内容をご確認して下さいれば、納得して頂けるかと」

差し出された小切手を手にする。それは紫に染め上げられた羊皮紙の特別製の小切手であり、この地の夜会の報酬証明書であった。ただ、そこに書かれている金額を見て、疑いが深まる。『チケット』と書かれた横には、エコノミーでもなく、ビジネスクラス以上の金額が記されている。だが、その下に書かれている『+Present』の意図が理解出来ない。

昨日電話越しに聞いた生瀬の笑い声が脳裏をかすめる。気持ち半分で日本に到着してるのかもしれないと天羅は自省をした。

「それでは、まず依頼内容ですが」

と、通例を繰り返した男は冊子から依頼を読み上げようとするが、天羅はストップと言うように掌を前に出した。

「お断りします」

「失礼ですが、あのマエストロのお弟子であるのなら、この程度の依頼を断る理由がないかと思われます。それでも無理だと？」

絶対そう言うと思った。一応は師であるマエストロの面子もあるし、断れば、自らの名を下げる事につながる。へっぴり腰に仕事は来ない。という普遍の言い訳もある一方で、別の言い訳も立つのだから。

「安心して下さい。この依頼は、昔から追い出す弟子を祝しての伝統です。例えば、通り名がすでにあっても、歴代の弟子達がこの儀式を経験していますよ」

線引きをしようとする天羅を役員はまくしたてた。つまりはそういう事だった。まったく、その筋の弟子が毎年輩出されるみたいになってくれる。天羅は嫌々それを口にする。

「依頼主はマエストロなんですね」

「ええ。ロンドン夜会における弟子の巣立ちを祝うための伝統です。

なにぶん流れ者や野良も多いこのロンドンではそうやって正式に認定する儀式が昔からあるのです。ただ、弟子を輩出される方はここ何年もいらっしやらず、かつ通り名を持つ方を送る以上、だいぶ簡略化されます」

そんな話をいつか生前の親父から聞いた事があった。

「ここで断つてもマエストロが残念がる程度の内容ですので、問題ありませんよ。しかし、その場合、報酬は受けられません。報酬内容にあるプレゼントとは夜会からのサプライズとなります。成功の折にはご希望の品をご用意させて頂きますがいかがいたしましょう」何かと痛いところを突かれてしまう。考える暇さえない。報酬にくらんで、とうとう二つ返事で返すしかなかった。

「報酬は、本当に何でもありませんか？」

「はい。基本的にロンドンで入手可能なものであれば、今日明日中にそろえる事も可能です。金額や数に制限はありませんが、そこは自身を値踏みして頂ければよいかと」

夜会の権力をもってすれば、明日までにそろえるというのは可能だろう。思わず喜びの声を上げそうなものを、天羅は沈黙に徹する。どうやら帰国するための飛行機の出発直前で依頼をうってきたのは、どうしても受けないといけない状況にするためだろう。実に夜会のノリだ。そういう突発的な嫌がらせほど誰かを思わせて不愉快になる。とはいえ、日本にいた時は親父共の金魚のふんのようにしか交渉の席には立たなかったし、親父が逝ってから、ほぼ生瀬家に交渉役を任せきりだった。そして、ここロンドンでは、地位のない人間が動くには師の顔を借りるしかなかった。なので、直接来る依頼には不満もない。この二年が無駄ではなかったと思いたい。それにどんな形であれ、この依頼をむげに断る大きな理由も確かにないのが自分にとって悲しい。

「飛行機のチケットはK国際空港着の直通便。便の時間は依頼の成功確認後に言います。席はビジネスクラス。差額は円で指定口座に振り込んでおいて下さい」

「はい。それでは、もう一つのプレゼントはお決まりですか？」
報酬のプレゼントはアレしかない——のだけど、それには多少の問題が懸念される。

「それなんですけど、何でもありの報酬は、今ロンドンで売り切れになっていても存在していたなら、入手できるとか。あつ、あと、日本の支店の本店がこっちにあってとか」

「言わんとしている事はわかります。こちらもお国に帰られる方の事を考えると、ロンドン限定は少々無理がありますね」

「つまりその、限定品の類は入手できるんですか？」

天羅は件のぬいぐるみについて話した。

「ああ、それは……結論を言いますと、可能と言いたいのですが、確実と言えません。日数超過や、最悪、入手不可能をご覚悟してもらわないと……」

「そう、ですね。けど、依頼が終わるまでは一応こういうものを探しておいて下さい。あつた時の届け先は日本の生瀬純孝宛てでお願いします」

天羅はポケットに入れていたカタログの切れ端を手渡した。

かしこまりましたと、メニューを閉じた役員は人ごみの中に消えていった。

天羅はため息をつく。あの役員の様子ではぬいぐるみは見つからないだろう。すぐにでもサンドラさんに連絡をつけた方が望みは大きいと直感が訴える。早速、公衆電話から連絡をつけたのだった。

トランクを空港の預かり所に預けた後、空港発ロンドン行きの特急に乗ってロンドン都心部に戻る。

目的の場所は閉館まで観光客で混雑するので、ぽつかりと空いた時間を利用し、最後の倫敦でのひと時を散策しながら、そこら辺のカフェやレストランでちまちまと時間を潰して夜を待つつもりだった。

だが、その最中、出会いたくない人物に道をふさがれた。

「よお、こんな場所で会うなんて驚きだな」

今日はよく正面に人に立たれる。

実年齢は三十代前半だが、絞り込んだアスリートのようにこけた頬が彼の印象を幾ばくか年熟させると共に、自信の大きさと思慮深さを表出していた。事実、彼はやり手である。

「ハロー、警部さん」

天羅はうだるように挨拶を返す。

安コートに身を包んだ天羅が貧相な野良猫であるなら、この人は血統書つきの駿馬だろう。癖っ毛のブロンドの長髪は常に後ろ手に結ばれ、クリーニングからおろしたたオーダーメイドスーツをびしりと決めた姿には、市警の人間という事に違和感を覚える。その笑顔は、むしろ企業の筆頭など多く人の世を渡ってきたように深みがある。引きつけられさえする顔の造形は才能の反映か。内に秘めたものを目に光らせたこの人の笑顔は一種の武器である。

「ヴィンセントでいいと言っているだろ。ところで空港の駅で人と会っていたようだが、あれは誰だ？」

「何で知ってるんですか。たまたまマエストロのお知り合いに会っただけですよ」

ふーん、とヴィンセント・カドグラファは眉をひそめて、天羅を目でなめまわした。

「夜会との取引だろ」

「はい？ ヤカイ……って、ああ、新しくできたナイトクラブにそんなものがありましたっけ？」

一応通過儀礼としてとぼけてみる。互いがカードを切り始めてもいない。

「ほお。では飛行機に乗らなかったほど、その人物には何かあるみたいだな。容疑者リストをあたってみるとして、空港に預けた荷物は何だ？」

やはり、そこくらいから後をつけられていたらしい。電車の中で妙な気配が一定の距離を保っていたので注意はしていた。

「勘違いされてるみたいなんです言いますが、あの人はマエストロの

知り合いです。それに、どうしても欲しかったお土産が見つからなかったもので、最後まで粘ろうかと」

「……土産とは、どこかの美術館から宝でも盗んで、という隠語らしいな」

「は？ 想像しすぎです。お土産ですよ？ 僕は明後日に日本に帰るんです」

それでも内心では宝石という言葉に反応してしまう。

「知っている。マエストロから聞いたな。最後の大事な仕事と洒落こむ気だろうが」

人をコインの表裏で区分するなら、この人はコインの縁といえる稀少な類の人間。疑いに対して恐怖が薄い。疑いがあるなら知ろうとする。暴こうとする。そのために表裏どちらにも類さない。

それは階級で固められた貴族の血筋からだけではない。彼は突出して自身の信念に対して忠実に疑念を取り払い、躍進する真からのエリートである。

下手に隠して、悪く勘ぐられても困ると、天羅は白状する。

「ぬいぐるみですよ。クマのぬいぐるみ。その手で有名な会社と大手のブランドのコラボレーションの物がどうしても欲しいんです」
煙に巻くと思っていたのか、想像からかけ離れた答えに、ヴィンセントは腕を組んでみせた。

「日本人のブランド傾倒は理解しかねるな。ああいうものは本来円熟した人間が持つものだ。それだけのために戻ってきたのか。金のかかる女を連れて歩く年でもあるまい」

「お仕事がんばって下さいね」

天羅は浅く一礼し、彼の脇を通り抜けようとしたが、まるで古くからの親友のように肩を組まれて振り向かされる。

「なあ、リヴィング。まだ時間はぎりぎりアフタヌーンだ。今から一杯付き合え」

「相変わらず強引ですね。それと、リヴィング？ ああ、そういえば言っていましたね。リヴィングっていうのを今捕まえようとしている

んでしたっけ。残念ですが、人違いですよ。それに僕は豆よりも緑の茶葉派ですので、では」

「そうか。俺もだ。ただし紅い方のな」

そう言って、ヴィンセントは最寄りのオープンカフェへと天羅を連行した。座らされた席さえ逃走しにくい店内奥の壁際を選ぶあたり、取り調べは長くなりそうだ。それでも何とか切り抜けるつもりである。

ダージリンティーを天羅はストレートで、ヴィンセントはミルクで注文し、さらに彼はパンケーキメニューを二種類も頼んだ。軽い夕食の量である。

席に座り、相對する二人だが、紅茶の芳しい香りが漂う中、えもいわれぬ午後のひと時に沈黙を満喫する。どうやらこの店は立地の雰囲気と共に味も当たりらしい。これならサンドラさんの紅茶タイムにもっと付き合うべきだったと今さらながら思いにふける。ただし、共にするのが、砂糖小さじ九杯を投下する眼前の男などを除けばだが。

沈黙を薄れさせるように、ヴィンセントは味を台無しにした紅茶を一口つけた。

「ここ最近、怪盗が出ないはずだ。日本に逃げる準備をしていたか」
「そんなに頻繁に出てたんですか。ですが、僕は日本に戻って高校に行くんです」

その間にパンケーキ一つを三口で胃の中に押し込んだヴィンセントに対し、天羅は飲み水をとりに行こうと腰を浮かせるが、意識的に警戒を高めたヴィンセントに気圧され、ズボンの財布を確認するふりをして、座り直した。

「お前がマエストロの所に来たのはいつだった？」

取り調べにしては、ずいぶんと懐かしい事を訊く。

「一昨年の夏ですよ。ヴィンセント警部とはホテルで目があった時に知り合いましたね」

それは渡英直後に泊まったホテルのロビーでのことだろう。

「覚えておけよ、天羅。奴はヴァシユロンの甥の中でも、切れ者だ」
マエストロはそう言った。最初の教えは予測と認識の符合。よく覚えて
いる。

その時から、この男の怖いもの知らずの口ぶりは変わっていない。
「男女であれば運命的な出会いだろうな」

齒が浮く台詞に、途中まで持ち上げたティーカップを降ろす。
嫌味でいったつもりが、熱意のある目を向けるあたり、話をそらす
気はないらしい。話術をもっと勉強すべきだったかと反省する。年
の功というものか、表現力も語彙もとても足りそうにない。日本語
なら勝てるのか自信をなくしそうになる。

お茶を片手に二品目を片付けようとするヴァンセントは、獲物を
狙う上目遣いで尋ねる。

「なあ、夜会の事を少しでも教えてくれたら、今は見逃してやって
もいいぞ」

何を言い出すやら。自分以外にも情報源は存在しているくせに。
いや、見事に引っかけたと思うべきか。

夜会とは、ある類の人間の社交界である。

だが、貴族階級や労働階級などの特権階級にいるからと言って、夜
会に名を連ねるとは限らない。ヴァンセントも元は貴族出身である
が、夜会の内実に関すれば、何一つ知らない。

だが、早急にこの話題に触れるあたり、何を焦っているのだろう。
天羅はそう思い、かまをかける。

「今日は急用でもあるみたいですね」

ほおぼりかけていたケーキを皿に置き直し、紅茶の香りで気を和
らげるヴァンセントは、眉間にしわを寄せ、難しく疲れを顔で表現
した。

「いつかのヴァカンスをどこぞの狼藉に潰され、娘との約束を守れ
ず、この時季外れにヴァカンスに行こうとした。だが、なぜか旧知

の方の所に住んでいた少年が、たった一人で空港にいる。これは何かあるに違いないと急遽俺一人だけ予定を変更したのだよ」

「ドタキャンで折檻されたみたいに言いますよね。……ん？ 警部、いつ結婚されたんですって？」

時間差で気づく新たな事実に怪談じみた土産話ができた、意気揚々になる。ああ、この人ノーマルなんだと一つ安心。それもつかの間。

「見ろ。あいつが踏みつけた」

ヴィンセントはスーツの内ポケットからテーブルの上へとそれを放り投げた。滑りながら、テーブルの上をくるくると回転し、二人の中心でピタリと止まる。

「……げ」

唯一の救いは折りたたみ式が特定層で普及していない事だった。

それは、液晶はへこまされ、ボタンの幾つかは落ち込み、バッテリーの蓋はゆがみ、角は傷だらけになった携帯電話だった。原形を留めているとはいえ、ここまで破壊できるらしいので、企業は早急に耐久精度試験をやり直した方がいいはずだ。

横目に見ると、両隣の席の黒人とアラブ人までも見ずにいられない様子。さらに、ふらっと来たウェイターのおねえさんに、無表情でしみじみとぐっと親指を立てられ、お代わりを注がれる。

「これは何の事件の証拠や遺品ですか？ もう犯人の目星は付いているんですか？」

「五日前に買ったばかりだ。なかなか、どうして、高い買い物だった」

無残にも、それはロンドンで発売されたばかりの新機種携帯電話だった。家族に時間を割けない男に見られる典型的なお仕置きのされ方である。

天羅は顔をあげると、ヴィンセントはにやりと自嘲し、しかし、どうだと自慢げに腕を組む。二人して対岸の人物と携帯電話を交互に見比べた。うわー、幸せそーだなー。

「いやあ、はは、さすが年季が違いますね。携帯に高級品があるなら間違いないくヴィンテージだと思います」

そこまで意思表示してくれる女性がいる事が本当にうらやましいと思いつつ毒づく。

機嫌を損ね始めた年上を前に、逆に冷静にふいに昔話が脳裏をかすめ、一つ合点がいく。

「もしや階級を捨ててまで、そのひとを選ぶ、とか？」

ぎよっと目を開き、日本人にはないほりの深さで感情を面に出す警部であった。

「そういう面だけマエストロの弟子らしいな。君はなぜかそういう裏事情にも詳しい。それともゴシップ好きの暇人か。なるほど、賊商売をやめさせてやるから、すぐに宮殿の門前で女王に忠誠を誓え。間違った日本観であるハラキリは古典の中だけでいいぞ。こう言え。私は社会の夜に夜明けをもたらすため、御身御国の犠牲となります、と」

「いえ、マエストロから耳にただけと言いたいですが、警部今日はよく自分のことを話しますね」

口は災いの元。話の弾んだところで、ここはあえてウェイターを呼び、店でオススメらしい高いケーキメニュー二つを彼のために注文する。

「罪滅ぼしのつもりか」

言いながらも、すぐに来たケーキに警部は手を出す。

甘い物好きの人は、どうしてか欲望に弱くて助かる。さらに話題をそらすべく、突然思い出したかのように天羅は空港での件を語りだす。

「そう言えば、空港であのぬいぐるみの実物を見たんですよ。こんなちっちゃな女の子が大事そうに抱えてたんですけど、人形がぬいぐるみ抱えてるみたいで、もんっつのすっごい可愛かったんですよ。そのお母さんも美人だったから、光源氏計画しとく分にももったいないくらいの子でしたね」

ケーキを楽しみきるために、ちまちまと動いていたフォークの動きが完全停止。話題にのってこないどころか、警部は、カップを口に付けた天羅の眉間に向けて、三つ又の銀を走らせた。

ゼロメートル距離から放たれたフェンシング熟練者の一撃は天羅の眉間寸前でぴたりと停止。一連の動作をあえて気づかなかったふりで貫くが、肝は冷える。

そのまま、にんまりと悪意のない嘲笑で警部の一言。

「ロザリーの名付け親は俺だ、光源氏」

ぶはあっ、と盛大にむせた。気管に赤い熱湯が入り、胸が焼けて咳がとまらなくなる。口元を手でぬぐいながら、警部を見やる。

「光源氏物語を読んだ事が？」

「最近出版された原語版解説付きのをな」

一泡吹かせた事に気を取り直し、ヴァインセントはウェイターにフォークの替えを頼む。

どんだけロンドン狭いんだ。いや、ちよっと待て。それでは年の計算が合わない。

自分の知っているヴァインセントは最初に会った時、約二年前にロンドンに來た時は独り身だったはずだ。あの女の子は5才程度。例えば結婚せずに子をなす文化観はあれど、この男に私生児や養子の噂はもとより、婚約に結び付く浮いた話は誰からも聞いていない。

怪訝な表情から悟ったように、ヴァインセントは自ら白状し始める。

「このまま寄り添いあえるのなら、あいつにとっては二度目というだけだ」

なかなかはまらなかったパズルのピースがはぴたりとはまる。

階級とは社会的になくなったように見えても、実際は色濃く残っていることは多い。女王の御膝元ではその影響力はまだまだ強い。

そんな中で、いつだったか夜会や社交界で話題になった話がある。貴族階級の身でありながら、一般階級の連れ子持ちと深い仲になった人物がいるらしいと。それはヴァインセントの事だったのか。

なるほど。ヴァインセントが元々いた家柄といえど、相当の位置にあ

る名家だと聞く。血族主義が強い家ならば、不肖の者など初めからいなかったとするほど厳しい緘口令がしかれたのだろう。

そういう事なら思い当たる節がある。ある時期、駆け落ちじみた依頼内容が流行ったのは、祝福か嘲笑か、それに対した周囲の態度だったという事らしい。貴族の私的なことを嘲るのは直接無理でも、皮肉は表に出てくるものだ。

話題にならずとも、秘密主義が前提の夜会もそういう風刺は抜け目ないものだ。

これはパズルが出来上がったら、一枚の一家団欒の画になるに違いない。だけど、ねえ？

「あんなお相手をほっぱり出して犯罪者を追いかけてるなんて、本当にかわいそうだと思いますよ。ヨーロッパはもっと悠長に人生を満喫するのでは？」

「勤勉な日本人から出る言葉とはとても思えんな。今現在、社会の悪い芽を潰している。働く父親の鑑^{かがみ}として申し分ない」

盛り上がる観客を前に、演者に仕立て上げられた警部は気分を害し、八つ当たりの如くケーキを口に運ぶ。その様は親にうまい事そのかされて、すねる五歳児のようだ。

こういう会話と光景にはノスタルジックのグラスから水があふれてしまいそうな気分になる。自然と舌が動きだす。

「男女が二人で歩けば、男の歩みはベルトコンベアの上を歩くよう、女性の歩くりズムは幾つもの歯車の上を行ったり来たり」

「何の話だ？」

「男は毎日ベルトコンベアの上を歩いてばかりいるから、女の人に歩く速度を合わせるとやきもきしてほとんど後ろ向きで歩く始末。女性はそれを早足に感じる。女性は女性で、目移りしながらゆったりしたいから、幾つもの好奇心むき出しの歯車に乗ってあっちへこっちへ……」

面と向き合っの舌鼓、ではなく舌打ちに言葉を遮られる。

「説法のつもりか」

「親父曰く、そういうものらしいですよ」

頭の痛い話だという風に、警部の珍しいため息が家族生活の全てを物語っている。

女性には男が早すぎて忙し（せわし）なくて、男には女性が自由な生き物で。仕事人間の男ほど、彼女とウィンドウショッピングに付き合えば如実に現れる心情を悟ったらしい。それにはまず合わせられる側が合わさないといけないのだそうだが、意思疎通はいつもできるところではない。

ふと見ると、さらにヴィンセントの頬張るケーキの量が増えていた。やれやれ、自分とヴィンセントは、接点はあるが、深い仲ではない。私生活に関してなど今になって初めて知る事もあるのだなとぼんやりとっていると、吹き込んでくる季節の風にさらに口が滑るのだった。

「いいですね。僕の親父は結構前に死にましたから。プレゼントも旅行もあんまりなかったですから、うらやましいですよ」

ケーキ一つを楽しみ終えた後、最後に残ったパンケーキも三口で平らげた警部は、優雅さと平然さをもってカップを口に運ぶ。

「それは俺に早死にせずになすむよう、転職しろという警告か？」

「誰も警部に警察を辞めろだなんて言うてませんが、ただ、僕は……」

「刹那的な悲劇の主人公はフィナーレにたどり着けないぞ」

そう言っている時点で謝っている事と同義だ。だが、少々自分のペースで足早にかけてしまったらしい。このままでは身の上話から親父の話につながってしまう。話題を切り替えようと、今更ぽと出た疑問に代わって、頭を下げてみた。

「警部、空港からご苦勞様です」

駅から電車、そしてロンドン到着まで。やけに敵意のこもった視線が後方から突き刺さっていたのだ。

「今更だな」

「はあ……」

「何だ？」

「もうヴァカンスに行かれたらどうです？」

ふんと、一連のかまかけに失敗し、警部は最後のケーキを突つつくのに戻る。それでも、いまだ話は名警部ヴィンセントの掌の内にある。

「早く夜会の事を吐け。そしたら今すぐにあの人形をプレゼントしてもいいぞ。なぜかうちに気に入られなかった方がある」

「え？ いや、それは、ええ〜？」

これには、さすがに動揺してしまう。アフタヌーンティーの漂いが夕風の中にもし出される。

あからさまに罠としか言いようがないのだが、しかし、塞翁が馬か棚牡丹か。夜会の報酬として入手できるかも怪しい限定品だ。自分のような下っ端の報酬に本気を出すはずがないと半ば諦めかけているだけに、その密約を交わすにあたり、怪我の功名で元がとれても、後から虎の穴から出てこなければならぬようだ。確かに欲しい。どうしてもそれを日本に持ち帰らなければ、できない事がある。二年前の自分が犯したであろう失敗を償わねばならない。成功するかはさておきだが、やらないよりはましだった。

それに相談したサンドラさん曰く、「仲直りには宝物になるものをあげるの」というのが有効らしく、ぜひ実行せねばならない。

だが、警部甘いぞ。そのミルクティーを日に何杯も飲んでいるから甘い。ここまでの話を総合すると、警部自身が夜会には触れられる可能性を示唆する事が言える。

「警部にいい話をしましょう。噂話なんですけど、警部も縁があれば社交界に招待されるかもしれないです」

「社交界にか？ 家督を断たれた身に来るはずがないだろ」

天羅はその事には意味ありげに軽く首を振った。

再び機嫌を悪くする警部の手元には、ミルクティーの糖分も切れかかっている。不可解な発言と否定に首をかしげられ、天羅は付け加える。

「たぶん、マエストロだとわかると思います。あの人、そういう話もできる人ですから」

根拠はある。貴族階級を捨ててまで、ただ一人を（いや二人も）選んだ騎士を夜会が放っておくわけがないのだ。人は人に溺れるという、それは別の物語となるのだが。

そろそろこの幕間もおしまいとなる。天羅は席を立つ。

「待て。話は終わっていないぞ」

「ロンドン二年そこらの僕よりもマエストロに聞くべきですよ。僕は外の人間ですし。その方がきつといいです」

マエストロの名前が利き、押し黙る。ヴィンセントもそれは十分に知っている。天羅から崩そうとするのは、マエストロは口が堅い事もあるし、リヴィングに関して疑いがある天羅の方が夜会の事をより多く知っているからだと推測しているためだ。

だが、あくまでも客は演者に踊らされ、結末で裏切られる運命にあった。苦渋を飲みながらヴィンセントは懷をまさぐってピリオドを打つ。

「財布を忘れたようだ」

「ええ？ 日本に帰るのに貸しにしっぱなしは嫌ですよ」

「どこぞの怪盗がまだロンドンにいて尻尾を出せば、取調室でも返してやるさ。なあ、リヴィング。せいぜい闇夜のロンドンには気をつけるんだな」

「来栖天羅です。で、ロンドンといえば霧ですよね？」

二年いたとはいえ、ロンドンには自分の知らない領域がまだあるようだ。この二年の経験が簡単に削がされるような気がして、自信が揺らぐ。

「まあな。最後に一つ。親父と言ったな？ 今いるリヴィングは何代目だ？」

回答の代わりに、ひよんな事を聞く。何を言っているのか本当に分からないと首を傾げてみた。

「まず、リヴィングの命名は警部だと聞いてますが？ 確か、その

怪盗、名前が英訳できないとかで、何年か前の誰かの通称から引用したと聞きました」

「そういう事を聞いてるのではない」

ヴィンセントは取り出した手帳の白紙にペンを走らせ、それを見せつけた。

「リヴィングの日本での、この名前として何代目なんだ？」

それを見て、少々カチンときた。そこには大きく、漢字慣れしない手で書いた【首獺い尋鬼】という歪な文字があった。

「シュリヨウ……タズネオニか？ いや、音読みだか訓読み？ 英訳するとB級映画みたいな名前としてだ」

ヴィンセントに命名のヒントを与えたのはマエストロだ。ロンドンでの初仕事後、マエストロに【首獺^{くびかりじんき}い尋鬼】がどういう意味なのか聞きに来たのは、ヴィンセント本人であり、そして、怪盗のある怪技から『リヴィング』と名付けたのだ。

「マエストロマエストロ……、自分で調べて下さいよ」

「本人に聞くのが一番なんだろうが」

倫敦に来てから二年弱も経つのかとふけりたいが、どうしても食らいついてくるヴィンセントにうんざりする。

「この字、日本にはそんな字はないはずですよ。この獺の字は手編ではなく獣編です」

空中で書き順も正しく獣編を描く。それがどういう意味か分からず、呆氣にとられた警部をよそにレジへと去る。

汚い『り』はいいとして、普通は『獺り』を『かり』とは普通読めないのだから、しらを切るしかない。

そこで天羅はこの自分のおせっかいは直すべきだと実感。お金を払い、思考のるつぼにはまっている後姿へわざわざ引き返した。

「ちなみにそれ、かなり低レベルな間違いです」

背後からの耳打ちに、すぐさま警部は何かの罵声を飛ばす。自分の字の汚さがわかったらしい。

「警部、僕は明日には発ちますので、ぬいぐるみはその時までにか

えたなら。では、失礼します」

そして、もう会いたくないと思い、さっさと逃げるのた。

自ら警部と仲良くするにも今は利益が感じられない。ロンドンに来る事は当然なのだ。見え透いた罠にはまりに行く獲物がどこにいるのだろうか。

元から期待はしていないし、ぬいぐるみはサンドラさん伝いに頼めば届きそうな気もした。日本に帰ればもういいとさえ思い始めているが、帰りたくないと思う。

「複雑だよ。石須文路……」

3-1、Wonder Wanderer (後書き)

前回の投稿から一ヶ月も開いてしまいすいません。ちょっと机には座れない体調だったので。全体的な清書や登場人物の入れ替えをしないといけないので<2、帰国>はちよつと飛ばします。多分割り込み投稿をするかもしれないけどナンバリングはするので。

3-2、Wonder Wanderer

指定場所に着く頃には日はとうに暮れ、街灯りが静かに闇夜を照らす。

言い渡された場所は彼の有名なロンドン塔。

儀式だというが、しかし、世界遺産をそういう場所を選ぶとは、ずいぶんとロンドン夜会は見栄っ張りだろう。ロンドンの最後を飾るにはいい場所だと苦笑するしかない。

怪盗が現れるのは夜がふさわしいが、午前零時ちょうどというわけではない。

屁理屈を自分に言い聞かせて、午後九時まで待ってから、ロンドン塔に足を向けた。

テムズ川沿いを歩き、ロンドン橋前の道路を横断。さらに進み、南側の門『反逆者の門』にたどり着く。そこでガイドの制服を着た衛士一人が無表情と直立不動で出迎えた。

「こんばんは。夜会から来た者です」

そう言うと、機械仕掛けのように規則的な動作で門を開け、すんなりと中に入れてくれる。役割柄、無断侵入当たり前のはずだと、自分にツツコミを入れたくなる。

人気がないとはいえ、周囲に怪しまれる前にさっさと城内に入ると、衛士の目の違和感が気になった。

そういえば、衛士の中には人間ではなく、数体の機巧人形や樞（欧州では自動人形か）が混ざっているという話は界限では有名だ。人形絡みは夜会絡みというほど、関係者は人形職人の手で作られた道具を使用する。

どうやら夜会が絡んだ者を迎える機械衛士とは、噂は本当らしい。イギリスは階級社会と言われるように、社交界の一部である夜会には貴族階級の権力者が多数在籍している。故に門番が機械仕掛けの人形でも不思議ではない。

それだけ夜会の影響力は強いという事だ。とても敵に回す気はないが、過去の偉人は、それも一興、と挑んだ猛者もいるというのだから想像が膨らむ。

実際は正面から大手を振って入れるのも、派手に立ち回るものではない、個人の用だからだろう。

ここに来るのは初めてだった。ロンドンの街光から城壁によって隔離された闇夜を渡り、数棟ある建造物の中、ロンドン塔の別名を冠すホワイト・タワーに入館する。

本来なら城内も非常灯が灯っていそうなものを、今日はなぜか一つも光を灯らせていない。夜会が伝統を重んじたか、中世以前の闇夜におののきそうになる。

当初は城塞として建てられたロンドン塔であるが、以降、宮殿や処刑場として様々な形で使用される事になる。さらにここで飼育されているワタリガラスといえば、さるロンドン大火事の際には大量の屍の死肉を食らったのだというが、占いによってワタリガラスを殺すとロンドンもイギリスも滅ぶという逸話の方が印象的だ。

一方、博物館としてもロンドン塔は実に様々な品が保管されている。宗教的、歴史的に意味のある物ばかりと、舞台としてはうってつけの場所だ。

けれど、処刑場とは無残な末路をたどるより、華々しく散れという戒めのつもりなのか。少し弟子に花を持たせすぎではないのか。

天羅はポケットにあった黒の革手袋を両手にはめた。

何か仕掛けがあるのは当然としても、どうも気乗りしない。

英国修行で鍛えられたのは単に体術や知識ばかりではなく、第六感としての直感もだ。

化け物王国イギリスならではの、人間はもとより、怪物と言える貴族や商売敵に同業者、そしてそれらに従う人形や使い魔を相手にしていたのだ。ただの場凌ぎばかりでは、いずれ自ら首を絞めかねないと心改める事になった。

マエストロには、その対処法その他諸々云々かんぬんをこっそり叩

き込まれた。

怪しい無機物の気配もない事がはっきりとわかる。元から夜目にも自信がある。真っ暗な城内もすたすたと歩いていける。人の気配はおろか畏さえないさそうなのだから、期待外れもいいところだ。

と、目的の場所——城内の教会に行き着く。

石柱が立ち並ぶ石造りの教会はあまり広くなく、いくつかの木製の長椅子と祭壇が設けられているだけ。

窓から微かな光が差す。祭壇の背後にある小さな十字架の置物が浮かび上がる。

そこに目的のものが吊り下げられていた。

ロンドン塔といえば、もしや史上最大のカットダイヤモンド——偉大なアフリカの星『カリナン』かと肝を冷やした。

「お粗末だ」

しかし何の事はない。目的のものが夜会の用意した無銘の仮面である。

祭壇に近づき、仮面に軽く触れてみる。過去に親父かマエストロに聞いた通り、何も起こりそうになかった。

依頼内容は仮面を運び、通り名の襲名を受けるというものだ。ただし、こちらの国のいずれかの通り名も継がず、古巣に戻るだけ。すでに通り名を持つ来栖天羅には無意味である。今回は夜会の役員への引き渡しのみだが、マエストロに渡しても同じだろう。それに家に行けば、サンドラさんが手料理で出迎えてくれるに違いないのだが、二年も居候した手前、見栄もあり、いまさら戻りにくい。

仮面を十字架から外し、外の光にかざして表裏を確認する。

表は古いすり傷から色あせ、裏は人の肌が最も触れる額や鼻先から褐色に変色している。鼈甲べっこうで作られたデスマスクをとりあえずかぶってみる。

「何これ？」

仮面といえば、怪盗にとっては必需品ともいえる。だが、この仮面は使い古されてはいるものの、目の部分が開けられていない。儀

式的な飾り物なのか、物の値段分の価値しかなさそうだ。

そういえば、この城の元の所有者はこの国で最上の貴族であられる。もし、この仮面が厳重に管理されるものであれば、その価値は儀式的な意味を含め、唯一無二となる。とりあえず、大事に扱おうと思う。

しかし、たったこれだけの内容で他人の帰国を遅らせるなんて、まさに嫌がらせ（サプライズ）だ。さっさと帰ろう。何より遠き日本への直通便は一日一便しかないんだ。

「いっそ、經由便で観光しながら帰ろっかな」

また遅らされでもしたらということもありえるので、出まかせにつぶやく。

ほんと期待外れなほど何も起こらなかった。もう面倒くさいので祭壇の後ろの窓からそのまま出ようと、身を乗り出した。

その瞬間、ざざあと吹いた温い風が首筋をなめる。それは外からではなく、何者かの登場によって生じた空気の対流。

感覚は全力で働いている。これは人の気配であってほしい。その類とめぐり合うには強運と才能がいると思うのだが、今日は厄日か。

ロンドン塔についてはそっとしておきたい逸話がまだまだある。

水滴が滴り落ちる音と共に鼻をつく独特のそれ、新たな人物の登場を意味する旋律は音と共に臭い。振り向いた瞬間、自分の顔を鷲掴みにする掌が鼻先に達そうと――

臨戦態勢に瞬間沸騰、首を傾け手をかわし、先手必勝後手必活、自ら相手の胸に突撃す。そして、力任せの当身を食らわせる。影は十字架を巻き込んで祭壇の向こうまで吹っ飛んだ。

「な、何？」

処刑場にはたいい幽霊見ただの出ただの怪談が存在する。アン・ブーリン王妃やヨーク公リチャードと、処刑場だったロンドン塔にはちゃんと名前のある幽霊の怪談が、日本なら祀られそうなくらい多数伝えられている。

しかし、この影には実体も体重もある。

（幽霊でも重さはあるような、金縛りとか。……自ら怖くしてどうすんだよ）

触れた感触からも硬いが空洞のある機械人形の質感ではないとして、獣でもない。人の体温だ。だからこそ、それよりも不思議な顔面が気になり、つい逃げる事も忘れ、その場で当身の体勢のまま残心をとる。

仰向けに倒された影はびくびくと闇の中で蠢いている。それはさながら油の切れた人形や、操り手のいない操り人形のようなだ。

夜目には関係なく、記憶が確かなら、体当たりをした時に顔を真正面から見ている。

だけど——、だけどだ。

影は低く唸りながら立ち上がる。そして首を振って意識を確かめる人間らしい動作を行い、面を上げていく。

思い出したが、処刑はほとんど斬首刑だったという。出沒する幽霊には首から上がないという話だ。

影は全身にぴったり張り付いた擦り切れのマントをまとい、そこからはちゃんと首が生えている。生えているのだが、その顔には何もない。真っ黒な能面のような。後手に束ねられた長髪に対し、目鼻口耳の凹凸もなく、妖怪のつぺら坊を思い出させる。

思わず唾を飲み込み見入ってしまう。仮に自分がその類に人並み以上で恐怖心をあおられるとしても、とりあえず冷静になれ。

同業者なら仮面でしかない。何よりこれが倫敦での最後の洗礼となるならば、挑まぬ天羅は来栖の恥だ。

人影の目があるならギロリとくる目線に代わり、間接を動かすたびに頭がぐらぐらと過剰に揺れる様が不気味さを増長させる。見ようによっては準備運動のようだが、まるで拾った首をつくろったみたいに安定感がない。

頭では分かっているものの、正体不詳の実体は果たして存在しているのか。どうやら恐怖から視界に修飾がかかり過ぎているらしい、と自分を判断。天羅は祭壇の上に飛び移り、上をとる。

そして、ガンマンの決闘に似た雰囲気が一瞬立ち込め、戦闘の火蓋が切られた。

手にした十字架を突きつけて、人影はそこからさらに翻したマントの下から構えたこぶしを振り下ろす。ひらりと祭壇上をかわして天羅は人影を飛び越える。

跳躍の頂点、振り向き様に十字架が点となって視線上を翔けるが、右片手で難なく掴み取り、着地と同時に影に投げ返す。

だが、十字架は祭壇に叩きつけられる。避ける影は大振りの隙をついて、水面をかける石切りの如く数歩で間合いを縮める。だが、何を思ったか、途中で無理矢理に地を蹴り、直角に天羅から距離をとった。

残念そうに天羅は投擲の右手のフォロースルーよりも、逆に腰元に当てるようにしていた左手を大きく振り払った。

（誘いに乗ってこないか）

猛獣を従属させる鞭は闇に紛れる漆黒。それが左片手の中に束ねられ、バシンと叩きつける響音が鳴る。

先ほどは鞭を自分を基点に叩き込み、一度体に巻きつけた鞭を遠心力の加速をもって、相手の額に一撃お見舞いしようとしたのだった。

「ここまで音が鳴るか」

天羅は愛用の鞭が本来なら炸裂音一つ上げないはずが、劣化から『毛』が抜け落ちて不必要に大音量で鳴る事に少々苛立った。そして、それを修繕する樞師の事も思い出しては痛々しく片目を閉じた。（やっぱり石須には心から謝らないと）

長椅子の対岸で両手を着いて人影はこちらを伺う。警戒心を高ぶらせては、低い姿勢のまま部屋の中心にいる天羅の間合いの外を扇状に巡り続ける。

腰を沈め、片手に畳んだ鞭を速射の姿勢で構えながら天羅は尋ねる。

「もしかしてここは他人様のシマだったの？　けど、変だな。世界

遺産は基本不可侵だっというマナーは共通のルールだったと思うけど、違っちゃったっけ？」

ただの方便を述べている間も人影はまるで威嚇する猿のように、時々脅しのようにフェイントをきかせ、隙を作らせようとする。

「幽霊にも縄張りってあるのかな？」

以前、猛獣の相手をさせられた事もあったが、それがまさか人のようなものに対して役に立つのかと天羅は思った。

向かい合ったまま、さらに数秒が経った後、警戒態勢を解いたのは向こうが先だった。人影は獣の姿勢を解き、自然体になるように手を下げた。そして一言。

「仮面」

という声は意外なほどに澄んでいた。年は自分よりも少し上だろうと推測できた。

「これ？」と脇に挟んでいる仮面の事かと訊くと、こくんと人影は首を振り、さらに付け加えた。

「よこせ」

「いやだ」

即答。

ちつと舌打ちが聞こえた瞬間、天羅は銃の速射ちの如く一直線に鞭を放った。そして、眉間の場所に鞭の切っ先が叩き込まれる。

しかし、人影は倒されていない。どうやら意識がある事に、攻撃をされた本人が一番驚いているようだった。それよりも人影は自分の顔に手をやり、覆っていたそれが無い事にはっとする。

「それでは、ここで僕達は会わなかった。そういう事にしてほしいのですが」

天羅の右手には新たな黒塗りの仮面を加わった。

そして、今度はパシンと小さく左手を打ち鳴らし、束ねられた鞭の切っ先が刃のような硬さから元の柔らかいものへと戻る。

対象に触れる瞬間を見極める事さえできれば、刃はやモリの足先のようにミクロン単位の爪の集まりになり、かゆい所に手が届く孫の

手にも勝る道具になる。熟練者が使えば性質や形状までも変える事ができるとされる、それが『百獣』という鞭の性質である。

正体をさらされる事は忍び込む者にとっては負けを意味するのが常だ。同業者ならオーダーメイドで仮面を作る事もあり、仮面裏側の型を素顔のままにしている紙一重もいる。

天羅の言葉は「おとなしく去れ」という情けであり、勝利者の強制である。

だが、まず逃げたのは天羅だった。硬化させた鞭の先端を碇代わりに柱に引っかけ、窓からの垂直の壁をまさしく駆け下りる。地面に着地し、一目散に逃走を図る。

しかし、その上空を舞う者あり。擦り切れのマントが覆いかぶさるがごとく天羅を追いつめる。そして、その場所に何かが撃ち込まれた。

が、すでに天羅はそこにいない。影は城壁の上を見上げた。街灯りを背に受け、演者は舞台の向こうへと飛び降りた。

人に紛れて、街中に逃げるだろうという裏をかき、天羅はすぐそばのロンドン橋へと到着する。そこで時刻が午後十時になろうとする事をビッグ・ベンが教える。

3-2、Wonder Wanderer (後書き)

夏バテ気味です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7951u/>

日帰りテクテク貴族

2011年10月9日11時28分発行